



TITLE:

經濟生活の發達と經濟政策

AUTHOR(S):

堀江, 保藏

CITATION:

堀江, 保藏. 經濟生活の發達と經濟政策. 經濟論叢 1942, 54(5): 520-534

ISSUE DATE:

1942-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/131675>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

經濟論叢

號五第 卷四十五第

月五年七十和昭

論叢

鎖國以後に於ける南方への關心……………

經濟學博士 本庄榮治郎

佛印に於ける信用對策に就いて……………

經濟學博士 松岡孝兒

新經濟論理……………

經濟學博士 柴田敬

經濟生活の發達と經濟政策……………

經濟學士 堀江保藏

研究

テュルゴの社會進歩の理論……………

經濟學士 出口勇藏

ジュースミルヒの人口學觀……………

經濟學士 青盛和雄

北支農業と灌漑……………

經濟學士 山崎武雄

說苑

統制經濟と保險……………

經濟學博士 小島昌太郎

稅制改革後の租稅統計……………

經濟學博士 汐見三郎

附錄

彙報

經濟生活の發達と經濟政策

堀江保藏

經濟政策學は理論經濟學と共に經濟の組織的研究を志す學問であり、經濟史學は經濟思想史學と共に經濟の發展的研究を志す學問である。併し乍ら經濟政策學が考究せんとする經濟政策も、それが既に行はれたものである限り、過去の事實であり歴史的事實であつて、従つてそれは當然經濟史學の研究對象のうちにも加へらるべきである。即ち歴史事實としての經濟政策は、我々の經濟生活史の一翼をなすものであり、而も何らかの形における經濟政策が行はれなかつた經濟時代・經濟段階の存しなかつたことを想起するならば、歴史事實としての經濟政策が經濟生活全體の發展に於て如何なる意味を持つかといふことは、一應考へなければならぬ事柄であらう。勿論經濟史の研究に於ては、經濟政策の研究は頗る活潑に行れてゐる。併しこゝでは個々の政策の時代的意味づけ、或は個々の政策の歴史的批判をなさうとするのではなく、經濟生活の發達史に於ける經濟政策の役割を概括的に述べようと思ふのである。

一 經濟生活の發達

凡そ經濟生活とは、人類が生る保存及び繁榮のために、外界自然に働きかけてこれを利用し及び相互に相交するところの生活部面である。而してそれは如何なる時如何なる所にも妥當する事柄であるが、併しかやうに考へられた經濟生活は、具體的な人間生活から抽象した概念であつて、現實に於ては國家或は民族に制約せられつつ、他の生活部面との相互制約・相互依存の關係に於て、變遷・發達し來り、また將來に向つても變遷・發達し行くものである。換言すれば具體的な經濟生活は歴史的事實である。歴史的事實である以上、先づ經濟生活に於ける國

家或は民族の役割は大きい。作田博士は、國民經濟は「國民團體に成立する總體經濟であり、國民生活を範圍とする交通經濟を統一體としての團體の立場から見たものである」と定義し、進んで經濟生活は原始の國民經濟から近代的國民經濟に至るまで、國民經濟として發達して來たと論じ、更に國民經濟に於ける國家の役割を決定的に重要視して「國民經濟の流に立つて終始を一貫せる基調となつてゐるものは、民族を地盤とせる基本的共同組織即ち國家に外ならない。國民經濟に於ける國家の役割は極めて重要であつて、これを無視せる國民經濟論は點睛を忘れた龍の畫と擇ぶ所がない」とせられる。

經濟生活はこの國民團體なる共同組織を地盤として發達し來つた。その内容は先づ自給自足經濟より交換經濟を経て流通經濟へ發達することである。古へに於ては、國民團體を構成する各個別經濟は夫々概ね自給自足の生活を營んでゐたが、個別經濟間の能力の相違、自然的環境の相違、或は不時の事情に基く貸借などを契機として、次第に財貨の交換が始つた。而もその交換は便宜上のものであつたが、かかる交換が累るにつれてそれは次第に必要交換に變じ、個別經濟の自給自足性は次第に失はれた。これ分業の發達と表裏する事柄であつて、やがて個別經濟は自己の生産物の一部を消費するに過ぎないこととなり、更に自己の生産物を直接消費せざる個別經濟や生産に直接たづさはらざる個別經濟も生ずるに至つた。かかる状態に立至れば、財貨の交換は流通に變じ、流通は一定の系統と秩序とを持ち、人々のはかかる流通の關係に入り込むことによつてのみ生活を營み得ることとなる。以上の事柄は所謂社會的經濟の成立・發達を意味し、社會學者の用語に従へば、個別經濟の相互助力の關係及びその範圍の擴大を意味する。而してかかる状態が國民團體の全範圍にまで擴大するとき、それは近代的國民經濟成立の重要な要件となるのである。

1) 作田博士「自然經濟と意志經濟」60—61頁。
2) 同上、78頁。

次はこれと密接な關係に於て生じた個別經濟そのものの變化である。上代に於て多くの民族は家族或は氏族共同團體に於て生活し、これを典型的な形態に於て見る限り、國民團體の立場より見れば個別經濟を構成し、その構成員は未だ獨立の經濟生活を營まず、族長の統率の下に共働によつて共同團體の維持・發展に身を捧げた。この血縁的共同體が崩壊して次に現はれたものは村落共同體である。これに於ては血縁團體を構成してゐた各家族が獨立の經濟を營み、同時に其等は血縁的紐帶による名残りを留めつつ地縁的共同團體を構成する。その獨立の經濟とはここでは自給自足の生活を意味し、從つて各家族の相互助力の範圍は極めて狭小であつた。勿論助力は生活の各方面に亘つて廣く行はれ、經濟生活に就て見るも、共同して土地を耕し家を建て、或は不時の入用に際して食物・種子・器具・奴隸などを相互に貸借するが如き助力の關係は、密接に結ばれたものであり、これ無くしては各家族の獨立は不可能な状態にあつた。併し半面に於て各家族間に未だ分業が發達してゐなかつたから、賣買・交換を通じての助力關係が成立する餘地乏しく、その範圍は、分業發達後の状態と比較すれば、頗る狭小であつた。併し村落共同體の成立並に家族の經濟的獨立に於て注意すべきは、國民團體より見て、村落はそれを構成する個別經濟たることを止めて行政上の一單位となり、家族が國民團體を構成する個別經濟として立現はれたことである。個別經濟としての家族經濟は、更に大家族より小家族へ分解し、更に國民團體の構成單位は個人であるとかへらるるが如き状態にさへなつた。而してこの分解の過程に於て個別經濟間の分業は愈々發達し、同時に社會的經濟が益々發達したことは上述の如くである。近代に入りて別に企業なる個別經濟が立現はれた。併しそれが社會的經濟の進歩に應じて生れ、更にその進歩を促進する性質のものであることはいふ迄もない。

最後に述べべきは經濟と政治との關係の變化である。既に經濟生活が國民團體なる共同組織を地盤として營ま

れてゐる以上、現實の具體的な經濟生活を政治から分離して考へることは、無意味であり不可能である。政治は國民に對する國家の統治の關係であり、國家の共同意志は政治に於てその具體的な姿を現はす。而して諸々の政治活動に必要な經費は、これを個別經濟への賦課によつて調達し、それを以て外敵の防禦や國內の秩序維持に當ると同時に、經濟的施設をも行ふのであつて、ここに我々は經濟生活に於ける政治的部面を見るのである。先に述べた個別經濟相互間の助力の關係を並列的經濟組織或は社會的經濟と呼ぶならば、政治的な經濟關係は重層的或は公的經濟組織であつて、兩者は相互に密接な關係にあると共に、現實の經濟生活に於ては、兩者その一を缺くを得ないのである。

併し乍ら兩者の間には、時代によつて起伏・消長があつた。個別經濟が夫々自給自足の生活を營んでゐた時代には、政治的經濟關係が強く前面に立現はれてゐたのに對し、社會的經濟の發達に伴つてそれは次第に背景に退き、所謂自由經濟時代なる一時代も現出した。また流通經濟が發達せざる時代に於ては、政治的經濟は國民的規模に於て現はれず、多數の權力者に於て顯現し、所謂分權的組織をとることもあつた。更に政治的活動には必ず權力行使を伴ふが故に、政治的經濟が略取の關係を派生し、この關係が著しく表面化した時代もあるが、これまた社會的經濟の發達せざる時代に著しかつた。更に政治活動に於ける經濟的施設の重要性の度合も、これと消長を共にしたといへよう。

かやうに政治的經濟と社會的經濟との間の消長を吟味するならば、たとひ作田博士の如く國民經濟を古へからの一つの流れと見るにしても、經濟生活は時代的・段階的特殊性を帶びて變遷し繼起したことが知られる。即ち血縁團體が國民團體の構成單位であつた上古に於ては、それは自給自足の生活を營み、國家はその貢納に基いて

主とし軍事的活動をなしてゐた關係から、經濟生活は血縁團體の共同經濟と呼べるるにふさはしい組織をとつて具現した。村落共同經濟に就ても同様であつて、例へば古代ゲルマン民族の國王即ち諸部族の統率者は、主として軍事的統帥權者として村落團體に臨み、これを構成する各個別經濟に對して直接に經濟的交渉を持たなかつたところから、そこに村落共同經濟なる經濟段階が成立したのである。村落團體に於て家族が個別經濟として獨立するに及び、他の事情と相俟つて、政治的經濟關係が國王を中心として一應全國民團體の範圍にまで擴大したのは、諸國に於て見られたところであるが、併し社會的經濟の未發達其他の事情の故に、それはやがて王侯を中心とするものに分解し、國民經濟は王侯治下の共同經濟として分立した。封建的經濟組織が即ちそれであつて、これまた主要諸國が等しく經過した經濟時代乃至經濟段階である。而してこの組織の下に於て個別經濟の自給自足性は次第に失はれ、交換經濟が發達して、その中心とも稱すべき都市も發生した。この都市は、西歐諸國に於ては封建領主より自治の特許を與へられ、自由都市として政治的にも獨立し、その周圍の農村と結合してここに都市經濟なる特殊な共同經濟體が成立したが、我國に於ては都市は封建的政治・經濟組織のうちに包攝せられた。何れにしても封建的組織の下に於ては、王侯が互ひに富強を競つた結果、一方に於て權力關係に基く略取も甚しかつたけれども、他方に共同經濟的施設の見るべきものも少なからず、またこの組織の下に於て社會的經濟が相當に進歩したるを以て、王侯がこれを助成するが如き制度を設け、政策を行つたことも否定せられない。かくて社會的經濟は交換經濟より流通經濟に進み、それは國民的規模にまで高まつた。これを決定的なものとしたのが、封建諸侯に分離委任せられてゐた統治權を中央に集中することによつて成立せる近代國家であつて、その成立と共に封建經濟は近代的國民經濟に高まつた。而して近代國家は、相互に富強を競ふために鋭意國民の富の充實に

努め、封建的諸制限を撤廢すると共に、經濟の強力なる國家統制を行つたが、その下に於ける社會的經濟の進展は、やがてこの統制を桎梏と感じ、かくて政治的經濟は一時背景に退いて、英國にその典型を見るところの自由經濟への發展を見たのである。併し今日その政治的經濟が再び前面に立現はれ、高度國防國家の建設に向つて國民經濟の全面的統制に乘出して來たことに就ては、ここに述べるまでもない。

二 經濟政策の發達

凡そ經濟政策は、與へられたる經濟組織體を客觀的條件とし、この組織體を代表する、若くはこの組織を持つ團體の共同意志を代表する政策主體の存在を主觀的條件とし、經濟生活の重層的組織を通じて行はれるものである。これを歴史的に見るに、與へられたる經濟組織體は、前述の血縁團體の共同經濟・村落共同經濟・封建的共同經濟・都市經濟・國民經濟であり、政策主體は血縁團體の族長から村落團體の首長・封建領主・都市の市會・近代國家の政府へと次第に變遷した。即ち歴史的發達の過程に於て、經濟組織體も政策主體も、夫々その前段階を包攝しつつ次第に高まつて來たのである。

この政策主體に於て表明せらるる共同意志の活動の一部である經濟政策は、軍事政策・教育政策・宗教政策などと共に、政策一般の部分³⁾をなす。而して凡そ政策は、河田博士に従へば、國家的意志に従つて一般に社會に秩序を與へ、これを組織づけ、社會生活機能を十分ならしむる働きをなすものであつて、かかる働きとしての國權行動を政策といふに外ならない。特に經濟政策は、國家其他の政治團體の力によつて、經濟的諸關係の確保・發展・創成のためになされる一切の方策措置の總體をいふと定義するのが普通であるが、それが一部の部分政策であ

る以上、他の部分政策と相寄つて、國家其他の團體の全體的發展を究極の目標とするものであることはいふ迄もない。そこで一應此等の定義に従つて、經濟政策の發展を簡單に跡づけて見よう。

經濟政策の歴史を考へる場合、重商主義の時代まで遡るのが我々の常識である。近代的國民經濟政策の歴史的研究にはそれで十分であらうが、廣く經濟政策の歴史の問題を當面の研究課題とする立場からは、そこまで遡るのみでは満足せられない。即ち例へばミッチャーリッヒは、都市經濟の段階に於て我々は始めて經濟政策に就て論ずることが出来るとし、その理由として、この經濟段階に至つて我々は幾多の特殊經濟より成る經濟的統一體の問題とし得るに至つたことを擧げ、これを次の如く説明してゐる。

『これ等の特殊經濟は、都市經濟がその存続のために必要とする多くの生産過程の一部門をそれぞれに擔當したのである。故に都市經濟は、相互に依存し合ふ幾多の部門より成れる一の經濟的組織體として出現し、これ等各部門の協力によつて一の統一體が形成されてゐたのである。かくの如き協力を可能ならしめ、而も效果あるものたらしめるために、この經濟的統一體は一の中央權力(市會)を必要とする。のみならずこれ等個々の部門は家内經濟に比し比較的移动性に富むものなるを以て、この必要は尙ほ更大である。若し中央權力がなければ、有效な協力も個々人の個別的行動によつて擾亂される應がある。故に當局の任務は、この社會を脅すが如き個人或は多數人の勝手な行動に對して、社會の利益を內的にも外的にも保護することである。我々は、經濟的方面に關するかくの如き進り方を、經濟政策の概念の下に包括する』。

併し乍ら、經濟生活が政治的經濟と社會的經濟とより成り、血縁的共同經濟より近代的國民經濟に至るまで、右の引用文に見ゆる統一體として、具體的な姿をとつて繼起したことを振返るならば、この統一體即ち個別經濟を包含して而もこれを超越せる高次の經濟主體の維持・發展を目標として、何らかの經濟政策が行はれたであらうことが豫想される。例へば血縁團體に於ては、これを構成する各人は共同生活の維持・發展のために共働すべきであり、その行動は慣習に従つて規律せられ、これに従はざるものには嚴しい制裁が加へられたが、この共働

4) Mitscherlich, W.; Der wirtschaftliche Fortschritt, sein Verlauf und Wesen. 2. Aufl., S. 36. (上田・江頭共譯「經濟史原論」40頁)。

の強制のうちに靡けながら經濟政策の萌芽が存した。かかる血縁的共同體が變質して、族長と一般構成員との間に身分的懸隔が生ずるや、前者に對する後者の奉仕を強制する意味での經濟政策がこれに加はるに至つた。村落共同體に於ても同様であるが、それは封建的經濟の段階に入るに及んで更に明確となつた。而してそれは一面に於て、全國民經濟が王侯を中心とするものに分解して成れる經濟組織體であるが、他の重要な一面に於て、封建領主中心の或は封建領主自身の經濟組織體であつた。即ち領主はかかる組織體の單なる代表者ではなく、主人であつて、これを構成する個別經濟に對して絶大なる權力を以て臨んだ。この權力の下に、個別經濟は共同生活の維持・發展のため、或は領主の富強のために協力を要請せられたのであるが、その協力は寧ろ奉仕と呼ぶのが適當であらう。而してこの協力を可能にし有效ならしむるために、或は灌漑・運送等の施設を行ひ、或は窮民の發生を防止する等の事が行はれたが、注意すべきは、この組織の下に於て、交換の發達を契機として社會的經濟が進歩して、この經濟關係に繋る個別經濟の相互助力の關係を如何に協力の關係にまで高めるかといふことを目的とする經濟政策が活潑に行はれるに至つたことである。これを西歐の例に就て見るに、農奴を解放して分益小作人とし、徭役勞働を物納又は金納地代に代へ、共同經濟施設を取上げて特權料收入の増加を圖りしが如きそれであつて、都市に自治權を附與したのも、實はその一面に於て、貨幣經濟の發達に伴つて擡頭せる商工階級の封建社會の維持のために協力せしめんとする意圖から出たものに外ならない。尤も政策全體が概ね財政政策の性質を帶び、また各個別經濟を主として領主に直接に奉仕せしめんとする政策態度が依然として捨てられなかつたことはいふ迄もない。

以上要するに、原始血縁共同經濟より封建經濟に至る段階に於ては、經濟生活は主として直接に土地の生産に

依存し、個別經濟は大體に於て夫々自給自足の生活を營んだ。かかる状態の下に於ては、各經濟組織體の組織の重心は、並列的組織よりも寧ろ重層的組織に存したのであつて、あらゆる經濟行爲が主として公法的に規律せられたのはそのためである。従つて經濟政策は、かかる經濟組織體の維持・發展のためにする協力若くは奉仕への強制、乃至はその違背に對する禁制として現はれるのが普通であつた。換言すれば、經濟生活關係が自ら協力又は奉仕の關係と保護・給養の關係とから成立つてゐたのであるから、個別經濟の相互助力の關係を如何に協力關係に高めるかといふが如き政策を行ふ必要と餘地とに乏しく、右の強制及び禁制が強く表面に現はれてゐたのである。これ即ちかかる段階に於て、經濟政策が取立てて論議せられない所以である。尤も最後の封建的經濟の段階に於ては、社會的經濟の進歩に伴つて、經濟政策を行ふ必要と餘地とが増大したことは上述の如くであつて、殊に西歐諸國に於ては、この組織の下に所謂市民的社會構成體たる都市が一個の經濟組織體として獨立すると共に、周圍の農村をも含めて都市經濟を構成し、独自の經濟政策を行つたものである。

この都市經濟に於ては、個別經濟間に廣く分業が行はれ、經濟生活に於ける並列的組織の比重が著しく増大したところから、この相互助力の關係を如何に協力關係にまで高めるかに就て、市會を政策主體として活潑に經濟政策が行はれたが、その内容は、都市經濟の自給自足を維持し、及び各個別經濟に對する生活の保障乃至その共存共榮を圖ることを目的とするものに大別せられ、當時の基督教の教説に出づる有機體的完全社會の理想の實現を目標として行はれた。従つてそこには一の經濟政策體系が成立した。併し乍らこの都市經濟の下に於て見られた商業の發達に伴ふ社會的經濟關係の發達並にその範圍の擴大と共に、都市による經濟の統制は無意味なものとなり、同時に都市經濟と並び存する封建領主による國土の分離統治は、經濟の發達にとつて大なる

障礙となるに至つた。この經濟自體に內在する要求と、他方に於ける政治的・軍事的要求とは相寄つて、より大なる經濟組織體の成立を促し、ここに國王を中心とし、民族的統一に基礎を置く近代國家の誕生を見、近代國民經濟が成立した。この近代國家が富國強兵を目標として、マ・カナンティリズムの名に總括せらるる諸々の經濟政策を行つたことは周知のところである。その具體的内容に就ては説明を省略するが、一言すべきは、この政策が領主經濟政策及び都市經濟政策を繼承し擴大せるものであつたことである。前者を繼承せる點は、それが專制的であり、全體主義の一面を有し乍ら國王中心主義であつたところに見られる。後者を繼承せる點は、先づ自給自足目的並にこれを遂行するための諸方策が兩者に於て殆ど同一であつたこと、次にその思想的根據に於て兩者とも個人利益よりも寧ろ全體利益を重んじたところに見られる。

尤も中世の全體主義的社會觀と近世のそれとの間には、既に文藝復興・宗教改革を経てゐるだけに著しい相違があり、即ち後者に於ては國家全體のうちに於ける個人の自由を尊重する傾向が強かつた。従つて後者は個人の自由なる經濟活動の發展、換言すれば社會的經濟生活部面の發展を助成する結果となり、その發展はやがて專制主義を桎梏と感じ、英國の名譽革命・米國の獨立戰爭・佛蘭大革命などを経て、國民經濟は自由經濟の段階に入ることとなつた。かくて自由放任の經濟政策が行はれることになつたのであるが、一言すべきは、それは一見政策の否認と考へられるけれども、實はさうではなくて、積極的な政策を行はざることを以て政策としたものであること之れである。即ち自由放任といふことは、國家が積極的な經濟政策を行ふことを極力回避したといふに止まり、それは經濟政策が存しなかつたといふことは別個の事柄なのである。

要するに、都市經濟の段階以來、經濟生活に於ける重層的組織と並列的組織との比重は次第に後者に傾き、こ

れに應じて經濟政策に於ける全體主義的立場は次第に背景に退いて、個別經濟の利益の増進乃至は個別經濟間の利害の調和といふことに次第に重點が置かれることとなつた。而して最後の自由主義經濟政策の下に於ける階級間並に國家間の利害關係が次第に紛糾するに及び、更に新たな經濟政策理想が掲げられ、新たな經濟政策が行はれんとするに至つたのである。

三 經濟發達に於ける經濟政策の意味

以上に於て經濟生活及び經濟政策の發達を概観した。以下その經濟政策が經濟生活全體の發達に於て如何なる意味を持つたかを述べよう。

第一に舉ぐべきは、所謂社會的經濟の發展に伴つて、經濟生活に於て經濟政策の占むる地位乃至重要性が次第に増大したことである。先に私は河田博士に従つて、一般に政策とは社會に秩序を與へ、これを組織づけ、社會生活機能を十分ならしむる働きをなすものであると述べた。而してかかる意志活動は先づ與へられた組織の制度化に始まるが、この事は上古以來行はれたところであつて、即ち經濟生活の重層的部面にせよ、並列的部面にせよ、共同團體の維持・發展のために生活慣習の制度化が行はれ、これに違背する者を嚴に處罰する方法が用ひられた。併し封建社會以前、即ち個別經濟が土地に依據して概ね自給自足の生活を營み、交換の發達に伴ふ社會的經濟生活部面が經濟生活に於て未だ重要な地位を占めず、重要なるは寧ろ政治的經濟生活部面であつた時代に於ては、個別經濟相互間の助力關係を、政策主體の立場から意識的に協力の關係にまで高める必要と餘地とに乏しかつた。

然るにその下に於て交換經濟が進歩し、更に流通經濟にまで發展すると、經濟生活は種々の重要な影響を蒙つた。即ち交換關係は權力服從の關係と異り、個別經濟の恣意に従つて結ばれるものであつて、それだけ經濟生活に於ける重層的組織の重要性は相對的に減じた。また流通經濟が發達して、貨幣の流れ、商品の流れ、兩者の比率關係である物價等の個人の意志から獨立した現象が生ずると、個別經濟の意志性すらも此等の無意識的な運動の制約を受けることになつた。更に經濟交通の範圍は擴大して、與へられた經濟組織體を遙かに超脱することとなつた。かかる事柄は要するに、經濟組織體に對する個別經濟の協力が、意識的より無意識的へと變化したことを意味する。他方に於て經濟組織體は擴大し高次のものとなり、特に封建經濟・近代國民經濟に於ては、相互に富強を競ふ必要が愈々大となつた。かくて經濟組織の單なる制度化のみでは足らず、積極的に經濟關係の確保・發展・創成のためにする經濟政策の重要性が益々増大したのである。ミッチャーリヒが都市經濟の段階に入りて始めて經濟政策に就て論ずることが出來ると述べてゐるのは、かくして大體に於て首肯せられるのである。

第三に舉ぐべきは、一つの經濟時代或は段階に於ける經濟政策の機能が、助成的機能と抑制的機能とを持つたことである。助成的機能とは經濟の自然的發達を助けることを指し、抑制的機能とはその逆である。かかる機能は勿論組織の單なる制度化に於ても見られたが、併し積極的な政策にあつては、人爲的要素が強いだけそれだけその機能は目立つた。例へば都市經濟に於けるギルドを通じての經濟繁榮策は、初めは所期の機能を發揮したが、後には商工業の發達を抑制するものとして作用した。全般的に都市經濟に於ける自給自足のための諸方策は、商業發達の前には維持せられなくなり、諸都市は政策の形式はそのままとするも、その實質を變じて寧ろ商業都市としての繁榮に努力しなければならぬこととなつた。例へばその通路強制を初めは經濟圈内の住民にその

必要品を確保する目的で發動したが、商業都市に變ずるに及び、商取引を促進する目的にこれを轉用した。また例へば近代國家は、その成立當初に於て經濟のあらゆる方面に保護助成の政策を行つたが、その効果が舉がるに及んで、それは經濟のより以上の發達のために桎梏と化し、ために佛蘭西では資本家的發展が却つて阻害せられ、英國では自由經濟への速かなる轉換が行はれた。自由經濟が自由放任政策下の經濟であつたことは前に一言したが、かかる政策が一應助成的機能を發揮した後に、新たに統制を要求する狀態が現出するに至つたことはここに述べるまでもない。

かやうに同一政策は、それが要望せられた初期に於ては、經濟の自然的發達に對して助成的機能を發揮したが、次第にその發達がこれを束縛と感ずるに至つたといふのが、多くの場合に於て見られた傾向である。勿論經濟政策は刻々の經濟情勢の變化に應じてその内容に變更が加へられた。併し結局その間の矛盾は避け得られなかつた。この點は封建社會の經濟政策を見れば最も明かである。而してそれは根本に於て、與へられた經濟組織體を維持し安定せんとする努力と經濟の自然的發達との矛盾に基く事柄であつて、あらゆる政策的努力がその助成的機能を發揮し得なくなつた時は所謂變革期であり、經濟政策の新たな展開が要請せられる時である。

第三は、かくして新段階・新時代に移つた經濟組織體に於ける經濟政策も、實は前段階の經濟政策を繼承し擴大せるものに外ならなかつたことであつて、その具體的な事例は、近代的國民經濟成立當初の經濟政策に於て見られた。而してそのことは、經濟の發達が飛躍的なものでないことと照應する當然の事柄であつて、即ち經濟政策もまた、人爲的・意識的なものでありながら、飛躍することを許さなかつたのである。

右の二つの點に關聯して、最後に舉ぐべきは、經濟政策が經濟の自然的發達、換言すれば經濟の自律性に順應

して行はれたことである。凡そ經濟現象は他の文化現象に比して大量現象として現はれ、大量現象としての經濟現象は無意識的且つ無意欲的である。併しこれを具體的な姿に於て見る場合、そこに重層的組織を通じて何らかの形の經濟政策が行はれなかつた經濟段階或は經濟時代のないことに想到するならば、この大量現象たる經濟現象も、實はそのうちに意識的な或は意志活動としての經濟政策が織込まれてゐたことが知られるのである。換言すれば經濟生活の發達は、自律的・合法的な關係と、意識的・意志的な經濟政策との綜合に於て行はれたのである。

然らばこの綜合は何を媒介として行はれたのであるか。それは前者の自律性そのものであつて、即ち經濟發達の自律性に順應して經濟政策が行はれた。例へば分業の發達に應じて、分業に基く個別經濟の無意識的な經濟組織體への協力關係を可能ならしめ有效ならしむるが如き經濟政策が行はれ、或は個別經濟の自由活動の絢爛たる成果に順應して、自由放任の經濟政策が行はれたのである。『かくかくの經濟政策が行はれたのは歴史的必然である』と普通にいはれるのはこれを示すものであり、別言すれば、經濟政策は現存の經濟機構を飛躍し超越することを許されなかつたのである。

併し乍ら、經濟政策が經濟發達の自律性に順應するといふことは、必ずしも前者が後者に後れて進むといふことを意味するものではなく、自律性に順應しつつこれをリードすることも屢々見られた。この點は經濟政策が助成的機能を發揮した場合に就て殆ど例外なくいひ得るところであり、殊に近代國家の經濟政策が、近代國民經濟の成立に如何に重要な役割を演じたかは、何人も否定せざるところである。かかる事は如何にして可能であつたか。それは經濟政策の客體及び主體に存する可能性によつてである。客體に於ける可能性とは、要するに經濟

の自律的發展が我々の意志如何によつて或る程度その方向を變じ、或はあるものを助成しあるものを抑制し得るが如き性質のものであることを指す。而してかかる可能性は、經濟生活全體に於ける並列的組織即ち所謂社會的經濟が相對的にその重要性を増すに従つて次第に減少した。かくて經濟政策を行ふ必要は前述の如く次第に増加した。併し乍ら他方に於て、主體の側に於ける可能性、即ち政策主體に於て表明せらるる共同意志の存在は、これによつて毫も否定せられず、而も一個の權力者を通じ、從つて屢々その恣意を伴つて發動した狀態から、個別經濟の意志が共同經濟の意志に次第に多く參與し、眞に共同意志として發動する狀態に進んで來た。この事は主體の側に於ける可能性の進化發展を示すものであり、同時にかかる可能性の比重の増大を示すものである。かくて經濟生活全體の發達に於ける經濟政策の重要性は次第に増加した。

以上要するに、經濟生活の全體は、無意識的な大量現象として今日にまで發達し來つたのであるが、そのうちには共同的意志活動としての經濟政策が織込まれてゐるのであり、而もその必要は次第に増大し、その重要性は次第に増加した。此等の事柄は、換言すれば、共同的意志の活動の範圍の増大、質及び量に於ける發展を意味するものであつて、かかる發展を促した經濟生活自體の發達、特に分業の發達に伴ふ個別經濟間の相互助力の範圍の擴大——それは全體的にも個別的にも經濟生活の内容が豊富になつたことを意味する——と共に、經濟文化全體の發達を物語るものであらう。